

香水

竹並 麻夕子

初夏の太陽は、緑の野いっばいに降りそいでいた。白い道には糸杉の並木が続き、丘のあちこちには、明るい砂色の家々が見える。柔らかな陽光が光と影の模様をつくりあげ、木々の緑は生まれたての赤ん坊みたい繊細な美しさを湛えていた。あたりの空気は蜜色に染まり、どこか遠くで時の針が歩みをとめたかに見える。まるで、トスカーナという土地全体に魔法がかかっているようだった。伝説の黄金の羊さえ、姿をあらわしそうなくらいに。わたしは、運転席のジュゼツペさんの方を向いた。

「本当に写真で見ると通りなんです」

ジュゼツペさんはじっと前を向いたまま、ハンドルを握っている。「きれいな所だとは知ってたんですけど、実際に来てみると、そんな言葉では足りません。何と言うか、特別なオーストラミみたいなものを感じます」

本当はもっと気のきいた言い方をしたかったのだが、わたしの英語力ではオーストラという言葉をひきだすのが精一杯だった。緑の揺りかご、イタリアの庭園といった言葉が、頭の隅でちらちら瞬いたが、それも陳腐に感じられた。

「皆そう言うね。この間来たイギリス人は、『神の恩寵を感じる土地だ』とか感嘆してたよ。私もなるほどと思ったもんだが。自然は美しく、土地は肥沃で、料理もワインもうまい。トスカーナを離れて、外の場所に住むなんざ想像もできないね」

ジュゼツペさんは頬に皺を寄せて、笑ってみせた。髪は真っ白なのに、頬はつやつやと赤く、大きな目が生き生きしているさまは、妖精のおじいさんを思わせる。

「さて、と。あんたをキアラ先生の所へ送り届けりゃいいんだが、それにはこの丘をてっぺんあたりまでのぼっていかなきゃならん」

ギアレバーをグイと入れ替えたかと思うと、車はガタガタと坂道を喘ぐようにのぼっていった。疲れ切ったロバが、ぜいぜい息を吐きながら歩んでゆくような頼りなさだった。道の両側には樹木が天蓋のよう張りだし、秘密めいたトンネルをつくりだしていた。じっと目を向けると、木々の葉の一枚一枚が鋭い美しさと、丁寧に彫りこんだような葉脈を持っているのが、よくわかる。わたしのむきだしの腕にも、濃い緑の影が落ちていて、その影が皮膚の中に溶けこんでしまっただった。

古ぼけた車は、座席シートもすっかり傷んでしまっているらしく、道のでこぼこの振動が、体を突き上げてくる。頭がくらくらするのを感じたが、わたしはぐっと唇を引き締め、前を見続けた。

1
動、さっと忍びこむ木漏れ日……といったものが続いた後、ジュゼツ

「ペさんが口を開いた。」

「お客さんも変わった人だね。キアラ先生から聞いたんだが、ここま
で香水を買いに来られたというじゃないか。香水なんて、有名なメー
カ―のものはいっぱいあるし、フイレンツェの薬局やカプリ島にだっ
て昔から伝わっている製品がある。どうして、とつくに製造されてな
い代物を求めて、日本から来る必要があるんだい？」

「本当に不思議でしかたない、といった風だった。
「たしかに変かもしれませんが、でも、わたしは自分のためにその香水
が欲しいんじゃないやありません。キアラさんが作られた香水に深い思い
のある人がいて、その人のために手にいれたいんです」

「わたしはきっぱりと言った。そう、このためにここまでやって来た
のだ。」

「ほう、そういうわけか」

「ジュゼッペさんは、眉をあげてみせた。」

「お客さんの言ってるのは、『トスカ―ナの夜』だな。キアラ先生が
四十年ばかりも前に作られた香りだ」

「ええ、それです」

「『トスカ―ナの夜』は、確かに素晴らしい香水だと思うさ。キアラ
先生は生化学者だが、調香師としての才能もあったんだね。よくある
高級品みたいに、ベタベタした濃厚な匂いもしないし、甘ったるい花
の香りをそこらじゅうにばらまいたりもしない。あくまでも、品良く、
慎ましやかに鼻孔を刺激して、香りそのものが心の奥底に忍び込んで
くる。そして、人をえもいわれぬ幸福な気分にかけてくれるわけだ。
考えてみりや、すごい香水もあったもんだ」

「そんなに素敵な香水なのに、どうしてキアラさんは製造をやめてし
まわれたんでしょう？」

「それは、わたしがずっと疑問に思っていたことだった。工場が立ち
いかなくなってしまうのだろうか？ それとも、外に個人的な理由
でもあるのか？ わたしはジュゼッペさんの横顔を真剣に見つめ、彼
の言葉を聞きもらずまいとした。」

「ウー、やっぱり弟さんが亡くなられたせいもあるんじゃないかね。
弟のマルチェロさんは薬局を経営しておられたんだが、そこも彼が死
ぬと閉店してしまった。薬局で売られていた『トスカ―ナの夜』も消
えてしまったというわけだ」

「消えてしまった……」
「わたしはその言葉を、口の中でつぶやいた。それは、降り続いた雨
が土中に沁みこむような、音楽が耳の奥のひだに吸い込まれてゆくよ
うなものなのだろうか。それより、もっと取り返しのつかない消滅で
あるような気がした。地上最後の蝶が、いなくなってしまうように。」

「私も、当時薬局で働いていたんだが、『トスカ―ナの夜』はすごい
人気というわけじゃなかった。それよりも、香りの強いオードトワレ
とか、スマイレの石鹸なんかの方がご婦人方には好評だったのさ。だか
ら、キアラ先生も自宅のラボラトリーで、時間をかけてつくる必要を
感じられなくなっただんじゃないかね」

「その時、トンネルがとぎれ、わたし達の前に砂岩の色あいを帯びた
レンガの建物が姿をあらわした。緑の芝が玄関ドアまで続いていて、

横手には菜園らしいものも見える。

「ああ。もう着いちまったよ。ここが、先生の家だ」

そう言つて、ジュゼッペさんは車をとめた。わたしはあわてて、ドアを開け外に出ると、ジュゼッペさんの方を向いた。

「本当にありがたいがとうございました。こんなに親切にしてくださって……」

ペこりと頭を下げたわたしに、ジュゼッペさんが手をさしだした。わたしの手などふんわりと包んでしまいそうなほど大きく、握るとフランスパンのような乾いた手ざわりがする。握手が終わった後も懐かしい感じのする温かさが、じんわりと残った。

ジュゼッペさんが、車をウターンさせていってしまふと、わたしは芝の中に足を踏み入れた。心臓がドキドキして、初対面の人に、会うというのが億劫に感じられさえする。ああ、こんなところまで来るんじやなかった。だつて、わたしのやろうとしてることは、すごく非常識なのかも——つい弱氣になつてしまつてしまつた自分を励ますべく、大きく深呼吸してみせた、その時だつた。ガアガアというけたたましい啼き声が炸裂したかと思うと、何かが足元にちよこちよこ走り寄つて来た。

驚いてよく見ると、それはアヒルだつた。真っ白な羽毛に包まれた体には、へらみたいな黄色い嘴がついていて、おまけに、胸元には青いリボンまで結ばれている。つづいて、もう一羽のアヒルがやってきて、同じようにわたしの足元でとまる。

わたしは、思わず笑つてしまつた。なんて、まあ。アヒルなんて、もつと牧歌的な農村にいるのかと思つてた。香水だとか、薬品をつくる場所にはふさわしくない。もつとも、この菜園つきの建物が香水工場になんて見えないけれど。

「チャオ」

アヒルたちの後からやつてきた女性が、こちらに微笑みかけた。

「あなた、ケイコ・イシヤマね。私が、キアラ・トルナトーレです。遠くから、ようこそいらつしやいました」

キアラさんは、背の高い痩せた女性だつた。細長い顔は上品で、曇天色をした青の瞳は、知性を感じさせる。銀色の髪をきりりと結いあげて、後ろでまとめあげているさまは、どこかの教壇にでも立っている方が似合いそうだ。それでも、額や口の端に刻まれた深い皺を見ると、もう七十歳はとうに過ぎているのがわかつた。

「ジュゼッペにフィレンツェまで、あなたを迎えに行つてもらつただけ、本当は私が行くべきだつたわね」

「とんでもありません。こちらの方が無理をお願いしたんですから」

わたしはあわてて手をふつた。

「じゃあ、中へどうぞ。……ああ、お前たちはだめよ」

ばたばた足音を立てて、ついてくるアヒルたちを入り口のところで

押しとどめながら、キアラさんはわたしを家の中に入れてくれた。古い木の扉の奥は、カラフルな彩色がほどこされた陶器の壺や、どっしりとした木製家具の並ぶ農家の佇まいだつた。茶色のテラコッタが敷き詰められた床を歩いてゆくと、大きな一枚板のテーブルがある食堂に出、キアラさんは、椅子に腰掛けるよううながした。テーブルの

上には、赤いラインの走ったりネンのランチョンマットが置かれている。その横には、ナイフで先端が切り取られたパンの塊や果物の籠があつて、生活の温かさが感じられた。

「突然、日本から手紙が届いてびっくりしたわ」

キアラさんは、薬缶を火にかけながらいう。

「もう十五年も販売をやめている『トスカーナの夜』をどうしても欲しいって書かれてるんですからね。このイタリアでも、そんな香りがあつたことなんて覚えてる人もあんまりいないと思うのに」

「わたしの父が昔、その香水を日本に輸入してたんです」

「そうだったわね。イシヤマさんの名前は覚えてますよ。弟の薬局で売られていたのを見つけて、とても気に入って下さったとか……。まあ、私にとっては数少ないお得意様の一人でしたね」

そう言つて、ポットにお湯を注ぐと、お茶のセットを用意しながら、わたしの方を向いた。

「ケイコさんが、『トスカーナの夜』を買いに来られたのはお母様のためね」

「はい」

わたしは頷いた。キアラさんの藍色の瞳とわたしの視線がぶつかりあう。

「お母様は、ずっと意識不明なのだそうだけど」

「ええ、もう一年になります」

答えた時、目の奥がじわりと熱くなつて、涙がこぼれおちそうになつた。あわててわたしは、手でこぶしをきゅっと握りしめ、感情が溢れだしそうになるのをこらえる。これまで、何度もそうしてきたように――。

母が倒れたのは、まったく突然のことだった。その頃、父はすでに亡くなつていて、彼のやつていた小さな貿易会社も人手に渡つていた。貿易会社といつても、高級バッグや装飾品を扱うような華々しいものではなく、フランスやイタリアなどのお菓子やジャム、石鹸といった日用品を仕入れる、つつましいものだった。それでも、わたしたち家族がそれなりに暮らせたのは、イタリアの一地方で老舗として知られるチヨコレート店の商品を、独占的に仕入れる権利を持っていたためだ。

父の死後、母は家の階下部分を改装して、ギャラリーとカフェにした。ギャラリーには、わたしの作品である彫金アクセサリーがひときわ目立った場所に飾られ、木製の玩具や染色されたタペストリー、ガラスのペーパーウェイトといった作家さんたちの作品が、まわりを囲むように並べられている。奥には、ガスオーブンや冷蔵庫もある調理スペースとそれに向き合つてカウンター席もあり、母は手を動かしながら、お客さんと話しているのがつねだった。

「恵子、下へ降りて来なさいよ。一緒にお茶でも飲みましよう」

母の声が聞こえてきた時、わたしは二階の部屋で、作業台に向かつているところだった。金鎚やドリル、やすりといった日曜大工みみたいな工具がでんと置かれていて、優雅さなどまったくくない部屋。でも、

わたしは懸命だった。

「うーん、今デザインを考えてるんだけど」

「そんなの、後にすればいいわ。煮詰まってる時は、休憩をして少し休めばいいのよ。そうしたら、いい考えも浮かぶってものじゃない」

「はい、わかった」

母の言葉に説得力があるのかどうかわからなかったものの、わたしは立ちあがった。階下からは、リンゴとシナモンの甘酸っぱい匂いが漂っていて、母がお得意のアップルパイを焼いたのがわかる。

「お茶は、ハーブティーでもいいわね？」

わたしは、下のカフェに降りていくと、母は聞いた。

「ハーブティーって何？」

「カモミールティーだけど」

「あつ、じゃあそれでいい」

わたしはカウター席に座った。さっきまで、かがみこんでいたせいか背中が痛い。

「さあ、出すわよ」

母はそう言いながら、オーブンの蓋を開け、こんがり焼けたアップルパイを取り出してみせる。香ばしい匂いがふわっと広がり、わたしはうっとりとしてしまった。うんと小さな子供の頃から、この匂いが大好きだった。何ていったらいいんだろう、それはわたしにとって幸せの象徴みたいなもので、つらいことや心に刺さった棘を忘れさせてくれるような力を持っていたのだ。

「個展の準備は、うまくいってるの？」

「なんとか作品はできそうなんだけど、なかなか自分でこれは、というのが作れないわけ」

「そりゃ、簡単にはできないわよ。大体、あんたは物事にきっちり向き合ひすぎるのよ。だから、できあがった彫金を見ても、どこか硬いわね。アクセサリーなんだから、もつと洒脱な遊び心の感じられるものを作った方がいいんじゃない？」

少々グサツとくる言い方だった。だが、当の母はけろっとした様子で、アップルパイを切り分け、皿に載せている。わたしはマッチ針が突き刺さったくらいに傷心を感じながら、聞いた。

「わたしのアクセサリー、そんなにつまんないかなあ？」

「そんなことないわ。精巧で丁寧につくるじゃない。花やお城のブローチなんか見ても、隅々まできちんと細工がしてあって感心する。だから、恵子の彫金にも熱心なファンが何人もいてくださるじゃない」

事実、その通りだった。わたしは照れ臭くなったのをごまかすように、母がカウターに置いてくれたアップルパイに手をのばした。編み目模様を思わせるパイの下には、とろとろになった餡色のフィリングが、つめこまれていて、口の中に入れると鮮烈な林檎の味が、一瞬だけ甦る。それは、わたしに秋の陽を浴びて、野原にすつくと立つ木と赤く輝く果実を思いおこさせるのだ。

「いつも思うんだけど、恵子はほんとに幸せそうにアップルパイを食べるわね」

母がうれしそうに笑いながら言う。

「昔、友達とけんかしたと言って、泣いて帰って来た時も、これを見

たとたん、うれしそうな顔してたものねえ」

「このリンゴがバターと溶け合ってたような香りが好きなんだ。幸せって気分させてくれるわけ」

「香り？ 味じゃなくて？」

「もちろん、お母さんの作るアップルパイは絶品の味です」

わたしはすぐフオローしてみたが、母は他のことに気をとられているようだった。

「香りがねえ……」

しばし、視線をぼんやり天井のどこかにさまよわせていたが、やがて言った。

「恵子のいうことわかる気がする。私にも忘れられない香りってあるから」

「えっ？」

「お父さんが昔、イタリヤから持って帰った香水のこと覚えてる？」

「イタリヤの香水？」

そこまで言われても、わたしにはぴんとこなかった。大体、今の母は香水なんて絶対つけない。ほのかなシャンプーの匂いが時々するだけだ。

「ほら、あんたがまだ小学生とか中学生だった頃、わたしが愛用してたやつ。黄色い箱に、緑の樹の絵が描かれていた……」

「あっ」

とたんに、ぱあっと扉が開いたように、わたしはそれを思い出すことができた。そして、野原を吹きわたる風と、苔と樹木のエキスが溶けあつたような香気が鼻をかすめてゆくような気さえした。

「あの、とても気持ちのいい匂いのする香水ね。わたしも覚えてる。お母さん、すごく気に入って、窓辺に置いたりして」

ハンカチに垂らしておいて、部屋の中にも浸みこませてたよね。そうだ、どうして忘れていたのだろう。父が、持ち帰ったさまざま

な雑貨類。薄い青やアイボリーの包装紙に包まれた石鹸、ギンガムチエツクの布で蓋を覆ったジャムの瓶、蜂蜜の入ったクッキー……：：：そう

いったものの中で、シンプルで素っ気ない黄色の小箱は目をひいた。そして、アルファベットで記された名前は、子供のわたしには読めな

くて、小さく描かれた木のイラストだけが、印象に残っている。とても

細かい木で、まるで樹木のお化けのようにさえ見えた。

「これは、糸杉って木なんだ。イタリヤでは、あちこち生えてるもの

さ」

父は、そう言っていた。

「あれは、『トスカーナの夜』っていう名前の香水だった。もちろん、イタリヤのトスカーナ州のことだけど、その植物や苔を採取したもののから精製したと聞いたわ。あの香りを嗅ぐと、なんだか自分が行ったこともない異国の丘に立っているような気がするの。うんと若返って、人生をこれから始めるんだというような気持ちで、丘の上から金色に輝く野原を見おろしている自分の姿が浮かぶわけ」

わたしは、びっくりして母の顔を見つめていた。若返ってなんていわれたって、現実にも目の前に見る母は五十半ば過ぎの女性に違いない。目の下には、シミが幾つも浮き出ているし、肌のたるみもかなりのも

のだ。それでも、母の口調には、心を揺さぶられるような何かがあった。風が野をざわざわと通りぬけ、丘に立つ母の髪もなびいている。けれど、彼女の瞳は生き生きと燃えていて、はるかな未来を見はるかしているようだ——そんな光景がわたしの心には浮かんた。

「そう言えば、あの香水、いつの間にか見なくなっただね」

「だいぶ前に、製造が中止になったらしいわ。いつか、お父さんががっかりした様子で、そう言ってたから」

「お母さんもがっかりしたよね」

「もちろん」

そこで、母はハーブティーを入れたポットとティーカップをわたしにさし出した。

「あいにく、フレッシュなものじゃなくてドライハーブだけいいよね」

そんなこと言っても、もうお茶は淹れられてしまっているのだ。わたしは、薄い黄色のお茶を黙って、飲み干す。いつも思うのだが、カモミールティーは青りんごを思わせる香りがする。

「お母さんは、その香水になぜ惹きつけられるんだろう？」

わたしはつぶやいた。今、はつきり思いだしたのだが、当時家には黄色い箱やフラスコを思わせる容器があちこちあった。洗面所の棚を開けると、『トスカーナの夜』が幾つも並んでいたことだってある。

「ハーブのエッセンシャルオイルだって、良い匂いがするけど。あれも、植物から抽出したエキスだよね？」

「ああ、そうね。でも、私にはアロマオイルっていうのはきつすぎるわ。香りが自己主張しすぎるのよ……恵子、あんたはまだ若いからわ

からないだろうけど、ある程度年を取った人間には、ふれたり感じたりするだけで、心のひだを震わせられるものが存在するの。子供時代の追憶とか、はるかなものへの憧れとか、甘い郷愁とかを思いおこさせてくれるわけ。その道案内になるのが、人によっては音楽だったり、

一枚の写真だったりするんだけど、私の場合は香水だったということ」

だからといって、訪れたこともない異国の香水じゃなくてもよさそうなものだ。そんな思いが顔に出ていたらしく、母は苦笑していたが、突然顔をしかめた。

「何だか、すごく頭が痛い」

そう言って、頭を押さえたかと思うと、次の瞬間母は倒れた。まるで、雷に打たれた木が落下してゆくみたいに。

「お母様は、脳内出血だったのね？」

「はい。もともと脳に動脈瘤があったらしいです。わたしも本人も知らなかったんですけど、後で医師からいわれました」

「それで、今どちらに？」

「自宅近くの病院に入院しています。植物状態ですから、完全看護が必要なんです。わたしも、ほとんど毎日、病室をのぞいてくるようにしてるんですけど」

「まあ」

キアラさんは痛ましいことを聞いたというように、眉をひそめた。

そして、手を伸ばすとわたしの頬にふれた。幾度もうなずいて見せながら。キアラさんの手は少し荒れていて、男性のように大きかったが、まるで何かに抱きとめられているかのような安心感があった。

「本当に大変だったわね」

その言葉があまりにも優しく、ゆっくりと発せられたので、わたしの中で、固くちぢかんでいたものが溶けはじめたみたいだった。思わず、ぽろりと涙が落ち、頬を伝っていくのに、わたし自身びっくりしていた。こんな遠く離れた場所でも、会って間もない人の前で、泣くなんて――でも、それは爽快ですらあったのだ。

「お茶をいれましょ」

キアラさんは、かすかに微笑するとガラスのティーポットを取りあげた。中には、緑の草や植物らしいものが入っている。

「レモングラスとカモミールをミックスしたものよ」

そして、ミモザ色のお茶を見た時、わたしの心に浮かんだのは、晩秋の日の情景だった。母とわたしとアップルパイ。あの時、母が言っていたことに、どうしてきちんと受け答えできなかったのだろうか？後悔しても、すべては追憶の中に行ってしまった。

「わざわざ、イタリアの田舎まで来るのは大変だったでしょう。こちらから、香水をお送りしたのに」

「いえ」

わたしは首をふった。

「この香水ができる場所を、この目で実際に見てみたかったです。そうしたら、母の気持ちもよりよく理解できるかもって」

大きく目を開いて、キアラさんは首をかしげた。小鳥を思わせるしぐさだった。そして、わたしは話しはじめることになった。母が最後の日に言っていたことを。

聞き終わると、彼女はうなずいた。

「ケイコさんのお母様のおっしゃることはわかりますよ。私がこの香水を作ったのも、この土地に深い思い入れがあったからです」

「でも、母はトスカーナには一度も来たことないんですけど。大の飛行機嫌いで」

そうだ、母は外国になんて行ったことはない。彼女にとって、イタリアも外の国も月よりも遠いところにあるみたいだった。

「そんなこと関係ないわ。それよりも、私の香水が遠い日本の女性に、深い印象を与えたなんて、とてもうれしいことね」

「母が実際に、この場所に来ることができたらどんなに喜んだらうって思うんですけど……」

言葉がとぎれがちになったわたしを励ますように、キアラさんはクッキーの入った皿をよこした。

「はい、これはオーク麦でつくったものよ。見栄えはぱっとしないけど、味は保証つき」

「あっ、ではいただきます」

「もう陽が傾きはじめてるわね。これから、フィレンツェに戻るのも大変だから、ここに泊まっていきなさい」

と驚くべきことまで言っただけのけたのだった。

「そんなこととして頂いて、いいんですか？」
 わたしは驚いて、聞いてしまった。何しろ、キアラさんとわたしは初めて会ったばかりなのだ。こんな丘の上の一軒家に、知らない人を泊めるなんて、常識では考えられないような気がする。
 「もちろん。私も一人暮らしで、たまには話相手も欲しいしね……それに泊まれば、トスカーナという場所の素晴らしさもよくわかると思う」

キアラさんは、いたずらっぽく微笑した。
 「それじゃ、香水がいかにかにできるかを、お目にかけてみましょうか？」

南ヨーロッパの典型的な農家だとばかり思っていたのに、食堂から廊下を出、浴室やトイレらしいドアを通りすぎると、突然「Laboratory」と書かれたプレートのかかる厚い木の扉がたちふさがっていた。それは、まるでここから別の空間が開けますよ、と暗示しているようだ。
 「ついてきて」
 キアラさんが取っ手を引くと、扉はするっと開き、中にはテラコッタの敷きつめられた廊下が続いていた。

「ここから、家とは別棟にあたるの」
 廊下の奥には、再び扉があつたが、それは木製ではない金属でできている。キアラさんは再び、その扉を開けた。

中は思ったより小さな部屋だった。十畳くらいしかないのではないだろうか。西日を避けるためか白いカーテンが窓にかかっている。部屋全体が、鈍色の光に縁取られていた。そして、わたしの目を吸いつけたのは、左奥にある不思議な物体だった。

それは、円筒形をしていたが、上からポンプのようなものが伸びていて、横の四角い容器につながっている。こう言ったら、奇妙きわまりない感じがするのだが、全体は美しい銅製で、車輪を思わせる金色の蓋がついていることといい、魅力的なオブジェのようだった。

この磨かれた銅の輝き、不可思議な形。これは、どこかで見たことがある。——ああ、そうだ。うんと昔の時代に使われていたという潜水服だ。わたしはそれを、博物館で見たのだが、潜水服なんてこんなところにあるわけない。

「キアラさん、これは何なんです？」

わたしは思わず聞いてしまった。

「ああ、これは蒸留器よ」

「えっ？」

「だから、蒸留器。香水を作る時、加熱した蒸気をここに吹きこむわけ」

「はあ」

何が何だかわからなかったが、あいづちをうつ。

「これを使って芳香を得るやり方を、蒸留法っていうんだけど、香水はほとんど、この方法でつくられるわね。……でも、まあそんなに難しいものでもないの」

確かに、部屋の様子はかなりシンプルだった。蒸留器のコーナーから離れた机の上に、フラスコや植物の標本、分厚い書物などが並び、

「香水工場」などというのも大げさな気がした。

「もうおわかりだと思うけど、私は香水づくりに関しては専門家じゃないの。もともと学んだのは化学で、物質を形作るものを研究していた。――十八才の時、故郷を離れて以来、ジェノバの大学でフラスコやビーカーを相手に格闘してたってわけ」

キアラさんは、そこでいったん黙り、わたしの顔を見た。藍色の瞳は何かを確かめるように、こちらを見つめていたが、それは過去の影を追っているようでもあった。

「私は一生懸命やったんだけど、それほど大した研究者じゃなかった。科学上の真理を発見するひらめきってやつに欠けたのね。ジェノバには十年いたんだけど、その大学には残れそうもなかった。

学期の最後になって、教師資格試験というやつをにらみながら、考えたわけ。このまま、うまくいったとしても、片田舎の学校の教師になるのが、せいぜい。そんなことでもいいのかってね」

「化学の教師にはならなかったんですね？」

「そう。大体、私はジェノバという街にもなじめなかった。活気のある港町で、ここよりはうんと都会だけど、何だか猥雑な感じがして。ジェノバにしている間じゅう、私の体のどこかが、トスカーナの野の空気を恋しがっているのがわかったわ。ドングリの木とか、林檎の木、素朴な花々とかも。……それで、ある日我慢ならなくなつて私はトランクと箱いっぱい荷物と車を積んで、帰ってきたというわけ。うるわしのトスカーナにね」

荷物を積んだ車を運転しながら、緑の丘陵を降りてくる若き日のキアラさんの姿が、わたしの目にも見えるような気がした。それは、きつと天気の良い日で、林檎の花は白く咲き、糸杉は芳香を漂わせていただろう。

「トスカーナの風景に入った途端、故郷を離れていた時間が消えるのが感じられた。車の窓を開けて、苔や樹木の香りを嗅いだとたん『ああ、これだ。私が本当に求めていたのは、この大地なんだ』と思ったわ。その夜、生まれ育つたこの家で、子供時代を過ごした部屋の窓を開けたの。外は深い夜が広がり、無数の星が煌めいていた。地上はゆるぎない静けさに満ちていて、木々の影が黒々と立ちはだかつていた。そして家々の灯りが、地上に落ちた星のように見えたわね。――そして、夜の匂いととも、糸杉や樹木の香りが押し寄せてきたの」

キアラさんは、入り口そばにある机に近寄ると、引き出しを開け、小さな箱を取り出した。そのままわたしに手渡したが、その時にはそれが何か、わたしにもわかっていた。「トスカーナの夜」だ。

「その香りに包まれた時の幸福感は、ひと言ではいえないかったわね。そして、頭のどこかで泉が湧き出るように、思いだしたの。これが、子供時代を通じての、私に大きな喜びをもたらしてくれたものだった。ね。子供の頃、夜眠る前に、部屋の窓を開けたものだった。植物たちは、神秘的な精気にみちて何かを語りかけてくるようだった。まるで、遠い世界からの呼びかけを聞くみたい、私はわくわくしていたわねえ」

「それ、よくわかる気がします」
うまく言えなかったが（キアラさんもうまく言えないらしいのと同

じように)、わたしには彼女が伝えたがっていることがよくわかった気がしていた。人は誰でも、大きなものに包まれていようような幸福感を感じることができると。とくに、こんな魅惑的な土地では。

「この幸福感を形にしたくて、『トスカーナの夜』を作ったの。幸い、薬剤師だった弟の協力もプラスに働いたんだけど、当時は大仕事だったものね」

彼女は、大きな円筒形のタンクを思わせる蒸留器の方に手をふってみせた。

「その試みも結局うまくいかなくて、今は農婦というわけです、はい」わたしたちの前で、蒸留器は赤みがかかった美しい暁色に照り映えていた。

その後、わたしはキアラさんに日本から持ってきたお土産をわたし。 「まあ、何かしら？」

彼女は目を輝かせ、箱を開いたが、そこにあるものを見たとき、わたしを抱きよせ、頬にキスした。

「とっても素晴らしい贈り物だわ」

それは、糸杉の形をかたどったブローチだった。彼女に何を贈るのがふさわしいかあれこれ考えた挙句、トスカーナの道筋にひよろりと突っ立っている樹しか思い浮かばなかったのだ。彫金で作られた糸杉は、キアラさんの胸元にすっと立っていた。

自家菜園で採れたトマトのソースをかけたパスタやロケット菜のサラダを御馳走になった後、わたしは寝室に通された。居心地の良さそうなベッドのそばに、窓があり、その外には吸い込まれそうな夜が広がっていた。丘陵は闇に沈み、木々の梢が風にざわめいているのが聞こえる。天蓋に散りばめられた星々が降るようで、それは家々の灯と一つに溶けあっているかのようにだった。

わたしは、思わず窓を開け、大きく深呼吸する。糸杉や苔や土の匂いがかぐわしく、なだれ込んできた。トスカーナの大地から吹いてくる風を感じ、星の光を額に浴びながら、わたしは理解していた。なぜ、キアラさんが、わたしにここで一夜を過ごすようすすめたのかを。

いつものように、その病室のドアを開ける。部屋の真ん中には大きなベッドがあり、母はそこで眠っている。眠るといい方がいいがただしいのならば。

ベッドの傍らに、サイドテーブルや椅子がおいてある外、ほとんど備品はなくさっぱりと簡素だ。一年以前から、母の全世界と化してしまった場所。わたしは椅子に座り、母の寝顔を見守った。唇はうつつらと開き、まぶたは固く閉じられたままだが、胸は規則正しく波打っている。

不思議なことに、母は今の方が若返ったみたいだ。目じりや口元の皺がほとんど消えていて、みずみずしくさえ見える。わたしは、絞った温かいタオルを、母の顔にのせ、ゆっくりふく。

「お母さん、気持ちいい？」

もちろん、答えはない。わたしは溜息をつき、今度はバッグから『ト

スカートの夜の』を取りだす。急がなければ。ぐずぐずして
会時間が終わってしまう。小さな瓶から二、三滴ハンカチにしのばせ
ると、ベッドサイドにそっと置いた。そうして立ちあがると、病室の
窓をそっと細めに開けた。はじまつて間もない夜の匂いが流れこんで
きて、それは香水の匂いにまじりあった。
わたしはそこで振り返り、ベッドの上の母を見る。母には見えてい
るだろうか。夜の彼方に広がる緑の平野、糸杉の香りと星のしるしに
満ちたトスカートの野を――。

(了)